毎日新聞　コラム「三重～る経済」
掲載日　　2023年7月24日
タイトル　個性豊かな公園づくり
執筆　　百五総合研究所　奥田千夏

筆者の住む団地で夏祭りが開催される。会場は団地内の公園。公園にわざわざ出向くのも、コロナ禍で4年ぶりだと気づき驚いた。

公園と言えば、今年4月、津市内で最大級の「中勢グリーンパーク」が大幅にリニューアルされた。公的施設を民間のノウハウを用いて運営する手法を導入し、カフェレストランやキッチンカーエリア、ドッグラン、バーベキューや日よけスペース等の設備が設けられた。レストランでは地元の食材を使った手作りのメニューを提供している。一般に公園の主な利用者といえば子どもを思い浮かべるが、新たな整備により「若者」「家族」「シニア」「地域住民」など、利用者の広がりが期待できる。

国土交通省によると、2021年度末で県内には2860の都市公園があり、その数は全国9位に位置する。また、自然公園の面積は全国4位と、有数の公園充実県と言える。

ただ、全国的に比較的小規模な都市公園を中心に、設備の老朽化対策やその安全性の維持などの課題が挙げられる。また、造設から長い時間を経て当初の役割や機能と、現在の利用者のニーズにズレが生じている。その結果、設備の更新が後回しになるという悪循環も懸念されるようになった。

活気ある公園にするためには、全ての公園が一様な機能を果たさなくてもよい。むしろ、公園ごとの地域特性や利用実態に応じた、個性豊かな公園づくりを目指してもよいのではないか。実例として、防災用品の備蓄や災害時の避難場所となる防災拠点の機能を持たせた公園、シニア向け健康器具と子ども向け遊具がバランスよく設置され、世代間交流と健康増進の拠点として活用されている公園もある。

たまには近くの公園に足を運び、公園がどんなふうに使えたらうれしいか、自分事として改めて考えてみてはいかがだろうか。